

# 高校国語科における

## セクシュアル・マイノリティ教材の授業の提案

— 谷村志穂「雪ウサギ」を用いて —

木村季美子

はじめに

本論ではセクシュアル・マイノリティを国語の授業で扱うならばどのような授業が考えられるかについて、先行実践やセクシュアル・マイノリティに関する社会的な動向を踏まえて論じていく。

### 1. セクシュアル・ライツとしての学び

『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』（木村涼子編 白澤社2005年）によると、日本の性教育は戦後の純潔教育に端を発しているという。女性は貞操を守るべきであり、自由奔放な性行動を悪とし、純潔を徳目として教える性道徳の教育である。こういった、女性にのみ押し付けられる「純潔」という性道徳規範は女性の性を抑圧するものに他ならないとして長く批判されてきた。近年では性について教育で扱うことは性の自己決定権、セクシュアル・ライツを教えることであり、人権の教育であるという認識が広がっている。

しかし2000年頃、性差別的現状を批判し、性差別的な再生産を断ち切ろうとするジェンダー・フリー教育の理念が「ジェンダー・フリーは性差をなくして中性な人間を創ろうとしている」などと曲解され攻撃的となった。教科書内での表現が教科書検定によって意図的に「ジェンダー」や「ジェンダー・フリー」、「性別役割分業」といった言葉が「性」や「男女共同参画社会」と変更させられ、「性差別的現状を批判し、その再生産を断ち切ろうとする」人権意識に対する理念が感じられないような表現や内容に切り替えられたのである。検定によってこのように変更される理由はジェンダー・フリー教育に対する根拠のない理不尽なバッシング現象がその背景にあった。ジェンダー・フリー教育バッシングと時を同じくして起こった性教育バッシングの特徴は、ひとつにジェンダー・フリー教育へのバッシングとセットで行われたこと、もうひとつがその攻撃が別の意図をもって教育への不当な介入という形で展開されたことにある。バッシングの発端となったものは厚生労働省の外郭団体「母子衛生研究会」が出した中学生向け教材『思春期のためのラブ&ボディBOOK』（以下『ラブ&ボディ』とする）、東京都立七生養護学校の性教育実践である。

『ラブ&ボディ』では女性が生涯にわたって自分の健康を主体的に確保することや女性の性の自己決定権（リプロダクティブ・ヘルス／ライツ）の観点から中学生へ避妊方法を紹介している。しかし、2002年5月29日の衆院文部科学委員会<sup>(1)</sup>で山谷えり子議員に「問題のある冊子」だとみなされ、翌30日の産経新聞にて「中学生にピルのすすめ!？」という見出しで報じられるなどしたことから、中身について議論されることなく回収、廃棄処分となった。『ラブ&ボディ』については「中学生に避妊を教えることは中学生に性交を奨励していることである」という言説が流布していたという。七生養護学校では特別支援学校の児童生徒がそれぞれの発達課題に応じて理解できるような性教育実践を行っていたが、当事者の声を無視しフリーセックスを推奨するような「過激な性教育」だとみなされて一方的に攻撃されたのである<sup>(2)</sup>。

現代の日本の児童生徒の性を取り巻く環境を考えると、性に対する学習機会は早期に行われるべきであり、中学生に避妊方法を教えることも特別支援学校においてそれぞれの発達課題に応じて性を学ぶことも児童生徒の性を自らが守るために必要なことである。現代、性教育は児童生徒ひとりひとりに国家主導で「こうあるべき」という性道徳を教え込むためのものではない。児童生徒ひとりひとりが自らの基本的人権であるセクシュアル・ライツ、自らの性の自己決定権を理解しそれを行使するために必要なのである。

## 2. セクシュアル・マイノリティに対する教育の動き

2015年4月30日、文部科学省の報道発表「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について<sup>(3)</sup>」が出された。これは児童生徒が自らのセクシュアル・ライツを行使するための環境整備でもある。以下、長くなるが引用する。

性同一性障害に係る児童生徒についてのきめ細かな対応の実施に当たっての具体的な配慮事項等を下記のとおりまとめました。また、この中では、悩みや不安を受け止める必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく、いわゆる「性的マイノリティ」とされる児童生徒全般に共通するものであることを明らかにしたところです。これらについては、「自殺総合対策大綱」（平成24年8月28日閣議決定）を踏まえ、教職員の適切な理解を促進することが必要です。

（中略）

2.性同一性障害に係る児童生徒や「性的マイノリティ」とされる児童生徒に対する相談体制等の充実

（中略）

・教職員としては、悩みや不安を抱える児童生徒の良き理解者となるよう努めることは当然であり、このような悩みや不安を受け止めることの必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく、「性的マイノリティ」とされる児童生徒全般に共通するも

のであること。

- ・性同一性障害に係る児童生徒や「性的マイノリティ」とされる児童生徒は、自身のそうした状態を秘匿しておきたい場合があること等を踏まえつつ、学校においては、日頃より児童生徒が相談しやすい環境を整えていくことが望まれること。このため、まず教職員自身が性同一性障害や「性的マイノリティ」全般についての心ない言動を慎むことはもちろん、例えば、ある児童生徒が、その戸籍上の性別によく見られる服装や髪型等としていない場合、性同一性障害等を理由としている可能性を考慮し、そのことを一方的に否定したり揶揄（やゆ）したりしないこと等が考えられること。
- ・教職員が児童生徒から相談を受けた際は、当該児童生徒からの信頼を踏まえつつ、まずは悩みや不安を聞く姿勢を示すことが重要であること。

2003年に性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律が制定され、学校における性同一性障害の児童生徒への支援も社会的関心が高まった。以後、文部科学省発表2010年「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」内で性同一性障害についても触れられるようになり、今回、性同一性障害だけでなく性的マイノリティについても触れられる運びとなった。性的マイノリティが学校で暮らしていくうえで相談体制を充実させ、当事者の性の自己決定権を尊重することを全国の学校へ通達したのである<sup>(4)</sup>。これは非常に大きな出来事である。

また、セクシュアル・マイノリティと教科書に関する社会の動きもみられる。

インターネット上の署名サイトChange.org (<https://www.change.org/>) で2014年から始まった署名活動「クラスに必ず1人いる子のこと、知っていますか？～セクシュアル・マイノリティの子どもたちを傷つける教科書の訂正を求めます～」(室井舞花による)では、学習指導要領の改訂に向けて教科書内にセクシュアル・マイノリティを取り扱うように文部科学省および教科書会社各社に向けた20300人分の署名を集め、2015年8月20日に集まった署名と1700のコメントと要望書を文部科学省に提出し、メディアにも取り上げられた。こうした動きもあり、高校教科書において2017年度から使用される家庭科、地理歴史や公民の教科書にてセクシュアル・マイノリティに関する記述が登場することとなった<sup>(5)</sup>。

また、このような機運の中で2016年9月9日から10月7日までの間行われた「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」に関する意見募集(パブリックコメント)において、寄せられた2974件の内、セクシュアル・マイノリティについてのコメントが368件あったという<sup>(6)</sup>。その結果、パブリックコメントの結果公示でまとめられた部分が以下の通りである。

(多様性と教育) ○LGBT(性的多様性)に配慮し、すべての子供たちがお互い

の違いを肯定的に捉え、多様な人々が共に生きる社会の実現に不可欠な他者への共感や思いやりを子供たちに培う教育を実現することが必要である。<sup>(7)</sup>

学習指導要領に明記されることで、高校教科書だけでなく義務教育課程の教科書においてもセクシュアル・マイノリティに関する記述が増える可能性が高い。

以上のように、セクシュアル・マイノリティの存在は徐々に社会および教育現場において認知されはじめたところであり、ようやく見える存在として立ち現れてきた。

### 3. セクシュアル・マイノリティを扱った授業、先行実践

社会や行政の中でセクシュアル・マイノリティに対する動きが出てきているが、授業レベルではどうか。文科省通達が出されるよりも以前からセクシュアル・マイノリティをテーマとした授業づくりを行っている渡辺大輔らは総合的な学習の時間においてセクシュアル・マイノリティの知識理解の授業実践を行っている<sup>(8)</sup>。渡辺の授業実践は、セクシュアル・マイノリティサポートグループが制作したDVD教材<sup>(9)</sup>を用いたりセクシュアル・マイノリティ当事者をゲストスピーカーとして迎えたりしてセクシュアル・マイノリティについて学び考える授業である。渡辺は実践を終えて授業にはセクシュアル・マイノリティ当事者の存在が必要であり、人的資源の問題から課題は多いがゲストスピーカーとしてセクシュアル・マイノリティ当事者を呼び、メディアで見かける笑いの対象としてのセクシュアル・マイノリティでなく日常的に生活しているセクシュアル・マイノリティ当事者の姿を可視化することが偏見をなくしていくために必要であるとしている。

セクシュアル・マイノリティの問題は人権問題であり、偏見をなくして児童生徒の日常の問題として考えるためにも当事者の声を取り入れ、日常的に生きる知識として学ぶことは非常に重要である。そういった授業は今後人権教育や性教育、総合的な学習の時間や教科の授業と枠を超えて増えていくことが期待される。一方、知識理解としてその存在を「知る」学びのみに留まるだけでは結局マジョリティとマイノリティという対岸の話になってしまう可能性もある。

国語の授業でセクシュアル・マイノリティについて扱った授業は少ない。『同性愛・多様なセクシュアリティ～人権と共生を学ぶ授業～』（人間と性教育研究所編 2002年子どもの未来社）では2つの授業実践がみられる。対象はどちらも高等学校で、一つは昆虫の生殖について扱った教科書の説明文教材を人間の生殖に話を広げ、セクシュアル・マイノリティと関連付けて読解する中でセクシュアル・マイノリティの知識を学ばせるというもの、もう一つは独自教材を用いてセクシュアル・マイノリティ当事者について学び、その後当事者に向けた手紙を書く学習をしているものである。説明文教材を用いたものは昆虫の生殖行動の様式について書かれた教材を人間に当てはめて考え、学習者主導でなく教員主導でセクシュアル・マイノリティの観点から読解する流れを作るなど強引さがぬぐえない

い授業展開である。独自教材から書くことへ展開する授業では書く活動を取り入れているが学習者の中にセクシュアル・マイノリティ当事者が含まれている可能性を考慮できていない点で問題がある。

筆者はセクシュアル・マイノリティを授業で扱う際にむやみに感想や自分のことを書くような活動は取り入れるべきでないと考えている。セクシュアル・マイノリティ当事者がセクシュアル・マイノリティに関する学びの感想を書かなくてはならなかった場合、授業内で自らのセクシュアリティが他人に暴露されてしまうかもしれないという恐怖心を抱くからだ。また、実践のように授業者が学習者の中にセクシュアル・マイノリティ当事者がいる可能性を考慮していない場合、マジョリティの学習者のための授業になってしまう。すると、セクシュアル・マイノリティ当事者は授業者の想定するように「マジョリティとして」書くことで自らのセクシュアリティを偽って感想を書くことになるだろう。自らのセクシュアリティを偽らなければならないことは自己否定につながる。自己否定につながることはセクシュアル・マイノリティを扱う授業をするうえで最も避けなければならない。セクシュアル・マイノリティであることは無論、後ろめたいことでもなければ罪悪でもない。異性愛者がそのセクシュアリティを書くことができても自らのセクシュアリティを書くことができない場面や、自らを偽らなければならない場面が設定されるとセクシュアル・マイノリティ当事者に大きな葛藤が生じ、自己肯定感が低下するなど大きな精神的負担になる。当然のことながら、教員は学習者のカミングアウトの自己決定を尊重すべきであり、セクシュアリティを書かせるなどという活動は絶対に取り入れてはならない。セクシュアル・マイノリティを扱った授業で書く活動を取り入れるならば慎重さが求められるよう。

二つの実践に共通して言えることはどちらもセクシュアル・マイノリティの知識・理解の活動の比重が大きいことである。二つの実践は、読解指導を、または書くことの学習を取り入れながら国語科の枠の中で行われているが、先述のように人権教育や総合的な学習の時間など、知識理解の授業は無理に国語科の枠の中にあてはめなくても良いのではないだろうか。教科横断的に扱うにしても高等学校の家庭科や公民の教科書にセクシュアル・マイノリティについての項目が採録され始めた動向から、生殖やセクシュアリティは体育科や養護教諭の授業、人権、法や暮らしは社会科や家庭科などと、他教科と広く連携しながら授業を展開することが今後期待される。

では、セクシュアル・マイノリティを国語科の枠でどのように扱うべきなのか。先行実践から得られた考察をまとめると二つの留意点が浮かび上がる。①知識理解の授業で終わらない工夫が必要である。②書くこと、話すこと、きくことなど自らの立場を明らかにして発信する学習には注意が必要である。

この二点の留意点に対して、本論ではフィクションを読み解く授業を提案する。フィクションであれば、得た知識を読解する中でコードや文脈を読み解く学習に生かすことがで

きるのではないだろうか。また、フィクションを読み解いたあと、読み手として作品について書く、話す・書く活動に展開すれば、当事者にも配慮しうる授業展開となるのではないだろうか。

#### 4. 高校国語科教科書のセクシュアル・マイノリティ

前節の授業実践では教科書の説明文、独自教材が用いられていた。そこで、今一度高校国語科教科書にセクシュアル・マイノリティをテーマとした教材が含まれているかどうかを確認する。調査対象となる教科書はジェンダースタディーズが盛んに教科書に反映され始める2000年頃よりも後に出されたすべての現代文A、現代文B、国語総合の現代文編である。対象となる年代に教科書を出版した教科書会社は大修館、桐原書店、東京書籍、第一学習社、旺文社、教育出版、三省堂、筑摩書房、右文書院、明治書院、数研出版の11社であり、教科書総数は180冊であった。調査の結果、セクシュアル・マイノリティそのものをテーマとして扱ったもの、ことばとして「同性愛」「性的多様性」「セクシュアル・マイノリティ」「性的マイノリティ」などのセクシュアル・マイノリティに関することばが含まれたものは180ある対象教科書の中から説明文教材、物語教材ともにひとつとして見つけることができなかった。国語科教科書においてセクシュアル・マイノリティが存在しないことは、裏を返せば恋愛＝異性愛であり、異性愛者の生活様式が前提であることを表していることになる。生徒が日常的に接する教科書が異性愛中心主義的な生き方しか提示していないことはセクシュアル・ライツの観点からも問題があるといえよう。

ただし、セクシュアル・マイノリティを示すことばこそ使われていないが、同性愛の物語として読むことのできる作品をひとつだけ見出すことができた。三省堂『明解国語総合』（平成25年～28年／2013～2016）に採録された谷村志穂の「雪ウサギ」である<sup>(10)</sup>。「雪ウサギ」梗概を以下に示す。

「のっち」には、たった一人の友達「ベッカ」がいた。しかし「ベッカ」は父親の転勤のため、札幌の高校へ転校してしまった。三年に一度は転勤による転校を余儀なくされる「ベッカ」は転校して一か月ですでに札幌に友達ができている。「ベッカ」を「私の心の中のもう一人の大切な人、いちばん大きな人」としている「のっち」は「ベッカ」が転校してしまっただけで一か月、まだほかに友達を作ることができていない。それだけでなく、「ベッカ」になれば「なんでも正直に話せる」という「のっち」であるが、「ベッカ」が転校して一か月が経っても自分から「ベッカ」に電話をできずにいた。そこへ、「ベッカ」から電話がかかってくるところから物語は始まる。

「ベッカ」が転校して以降「死んでいるみたいだった」「のっち」は電話を切った後、自分の体温が上昇し汗ばみ、頬が紅潮して目が輝いていることを自覚する。また、電話では友達ができずにいることを打ち明けた「のっち」を「ベッカ」が励ます。「ベッカ」が転校する前においても「のっち」の原動力は「ベッカ」の笑顔にあり、「ベッカ」のいな

い一人の状況では行動できない。それほど「のっち」にとって「ベッカ」の存在が大きいのであった。「ベッカ」に「札幌においで」と誘われる「のっち」であるが、冬の雪道を跳ねるように歩く「ベッカ」を思い浮かべるだけで、現実的に札幌へ行くことは考えられていない。電話を切つてからなぜ自分から「ベッカ」に電話を掛けられないのか、なぜ「ベッカ」のように友達を作れないのか、何を恐れて行動に移せないのか自問するのであった。

その日の晩、寝付けずにいた「のっち」は徐々に「ベッカ」のところにへ行きたい、「ベッカ」に会いたいという一か月我慢してきた思いを止めることができず、寝床についていた両親を起し涙ながらに「札幌に、行きたい。ベッカに会いに行きたい。」と打ち明ける。「ベッカ」に電話をし、日取りを決め、航空券の予約や手続きを全て自分で行うことを条件に両親から了承を得た「のっち」はすぐさま手続きや「ベッカ」への電話を済ませて札幌へと向かう。「ベッカ」は電話口で「すごくかわいいもの」を見せることを約束し、当日は空港に迎えに来ていた。

大通公園の並木を見ながら札幌の街を「ベッカ」にくっついて歩く「のっち」は「ベッカ」に手を引かれ北大の農学部の校舎の屋上へと向かう。その屋上からは「ベッカ」がこれから住む札幌の街が一望できた。自分がこれから暮らす街を紹介する「ベッカ」を「のっち」は羨ましく思い、同時に改めて好きだと感じ、今ここに一緒にいられることを幸せに思うのであった。そして、「ベッカ」の指示する先、農学部の中庭に、白い雪ウサギが跳ね回っているのを「のっち」は見る。「ベッカ」はそれを見せて「東京で見つきたいちゃんかわいい人はのっち、札幌で見つけたのは、このウサギ、世界のどこかに、いつもかわいいものがあるって信じてる。」と言う。「のっち」もそれに応えて、「強くて光るもの、東京ではベッカ、ここでは空に輝く星たち。」と言う。二人が手を繋いで物語は終わる。

## 5. 友情としての読み、恋愛としての読み

ここで、本作品を高校国語科教科書に採録した三省堂が本テキストをどのように捉えていたのかを確認する。三省堂平成25年度版の新課程用国語教科書『明解国語総合』の内容解説資料によると、「雪ウサギ」の要約は以下のようになっている。

親友の「ベッカ」が遠くへ転校してしまった「私」は、ひとりぼっちで取り残された気持ちで毎日を過ごしていた。何をすることも自分からは動き出せない「私」は、あるとき「ベッカ」のかけてきた電話の言葉をきっかけに、彼女に会いに行くことを決心する。喪失の体験をとおして少女が成長する姿を描く物語。(11)

「のっち」の成長のカギを握る存在として「親友の「ベッカ」」が配置されているのである。三省堂では、「のっち」と「ベッカ」は親しい友人関係にあるとしている。したがって、採録した三省堂は本テキストを同性愛の物語ではなく、友情や成長の物語と

してとらえていることがわかる。本論では、読みの一つとして「雪ウサギ」を「のっち」と「ベッカ」の二人の恋愛の物語として解釈する読み方を提案する。以下、「雪ウサギ」が同性愛の物語だと解釈できる記述を確認していく。作品の冒頭部を引用する。

ベッカの声は、心のどこか深いところに、そう、雪のように舞ってきたというのに、電話を切ると私の体温はすっかり上昇していた。

冬だというのに全身が汗ばんで、私はパーカーを脱いだ。洗面所まで行って鏡を見ると、顔が赤くなって目が輝いており、ようやく私は生きているのだと見つけることができた。この頃私は、死んでいるみたいだったから。

電話越しで「ベッカ」の声聞いた「のっち」が体温を上昇させ汗ばみ、頬を紅潮させているのである。相手の声を聞いただけで体温を上げる、というのは恋愛の文脈でよく用いられる表現ではないだろうか。それだけではない。「ベッカ」と電話した晩に両親に「ベッカ」に会いに札幌へ行きたいと打ち明ける場面を引用する。

札幌に行きたい。ベッカのところへ行きたい。行ってみたい。という気持ちがどんどん、どんどん心の中に広がっていくのを感じた。心臓のドクドクと一緒にあって、その気持ちが大きくなっていくようだった。

(中略)

「札幌に、行きたい。」そう言うと、体が小さく震えた。それまで一か月、ずっと我慢していた気持ちがあふれ出して、パジャマの袖口を目もとにあてても涙が止まらないのだ。

「ベッカに会いに行きたい。」

一か月我慢していた「ベッカ」に会いたい気持ちが抑えきれず涙を流しているのである。会いたい気持ちから涙を流すという表現もまた、恋愛の文脈でよく使われる表現である。

「雪ウサギ」が恋愛の表現が用いられながらも同性の恋愛の物語だと読解しにくい理由は、読み手が無意識に恋愛＝異性愛という異性愛中心主義に基づいて異性愛の文脈で読むからではないだろうか。この場合、読み手のセクシュアリティは関係ない。マジョリティが作り出したマジョリティ（異性愛）の文脈を、マジョリティ／マイノリティ関係なく持ち合わせているからである。したがって、異性愛の文脈を多く経験した読み手にとっては、異性ならば友人関係から恋愛関係に発展し得ること、物語に異性の二人が配置されることがのちに恋愛につながる可能性を経験上知っているのである。

しかし、同性愛においても同様である。同性二人の友人関係は恋愛関係に発展し得るし、同性二人がいればのちに恋愛につながる可能性も当然ながらあるのである。だが、同性愛の文脈を経験してこなかった者、同性愛の文脈を持たない者は「雪ウサギ」の記述におい



て恋愛の表現がなされていてもそこに配置されるのが同性二人である限り、二人の関係性は恋愛だとは気づかない。「雪ウサギ」の場合は特に、作中に出てくる「友達」という言葉によって二人の関係性は収斂されてしまうのである。「雪ウサギ」内ではじめに「友達」という言葉が用いられている部分を本文から引用する。

たった一人の友達だったベッカが、父親の転勤で札幌の高校に移ってしまった。

この一文は「のっち」が電話口で「ベッカ」の声を聞いて体温が上昇する冒頭部分にある。始めから数えてわずかに7文目に挿入される「友達」という語は同性愛の文脈を持たない読み手にとって「雪ウサギ」が恋愛の話ではないことを方向付けることになり、「友達」という濃淡のある関係性に関してあまり考えなくなることとなる。

そこで、「雪ウサギ」における「友達」の記述を確認していく。

たった一人の友達だったベッカが、父親の転勤で札幌の高校に移ってしまった。ショートカットに紺のハイソックスのよくにあうベッカにはすぐに札幌でも友達ができたらしいけれども、私は取り残されてしまった。まるで、砂浜にたった一匹、残された赤い蟹みたいに。

「のっち」にとって「友達」は「ベッカ」たった一人であることが書かれている。「のっち」の中の「ベッカ」の存在の大きさは以下のとおりである。

でも私は、ベッカが笑ってくれるから、何かできた。一人じゃできないし、他の子にもできない。ベッカは私の心の中のもう一人の大切な人、いちばん大きな人だった。

唯一の「友達」である「ベッカ」は他の子では代わりになりえず、唯一無二の存在であることが語られる。「ベッカ」が引越して一か月が経っても「ベッカ」のような「友達」ができずにひとりであることを「のっち」が電話口で相談する場面を引用する。

「友達ができないんだ。」私は正直にそう言った。

「のっちほど、笑いのセンスのある子はいないよ。」と、ベッカは言って、彼女の心の中のアルバムから幾つかの小さな思い出を拾ってくれた。

(中略)

私はなぜ、自分から電話ができないんだろう。ベッカのように、友達を作ることができないんだろう。何を怖がっているの？

ここから、「のっち」にとっての「友達」という存在は「ベッカ」に相当する存在を指すと考えられる。「のっち」に対して「ベッカにはすぐに札幌でも友達ができたらしい」こ

とが「のっち」にとって「取り残されてしまった」状態であると述べていたことから、一か月の間で「ベッカ」に変化があったことに「のっち」は気づいている。自分から電話をすることで「ベッカ」の変化に気づいてしまうことを恐れ、また、自らも「ベッカ」に相当する存在（友達）を作ることによって自分のなかの大きな存在である「ベッカ」に揺らぎが生じてしまうことを恐れているのではないかと読み取る。そのような怖れも抱きながらも会いたい一心で「のっち」が札幌へと向かった場面を引用する。

「ねえ見て、ここから、札幌の街がみんな見える。私がこれから住む街だよ。」

鼻の先を真っ赤にして、白い息を吐きながらベッカが言った。私は羨ましかった。そして、そんなベッカがやっぱり好きだと思った。今ここに一緒にいるのが幸せだった。

一か月離れていた「ベッカ」がこれからは見据えて、それを「のっち」にも共有する場面である。これからは見据える「ベッカ」を羨ましく思いつつ、「そんなベッカがやっぱり好きだと思った。今ここに一緒にいるのが幸せだった。」と「のっち」は語る。羨望であり、好意であり、それらに幸福を感じていることがわかる。そして、以下に引用するのが物語のクライマックスである。

ベッカは私の冷え切った頬を指で押した。

「東京で見つきたいいちばんかわいい人はのっち、札幌で見つけたのは、このウサギ、世界のどこかに、いつもかわいいものがあるって信じてる。」

ベッカの父親は、三年に一度は転勤する。海外に行くこともある。

「じゃあ、私も見つけたよ。強くて光るもの、東京ではベッカ、ここでは空に輝く星たち。」

私は夜の星を指さした。ウサギたちもきつと、その星を見ているのだなと、思った。私たちは手をつないで、夜の空に吸い込まれそうに、その時間に溶け合っていた。

これまでの記述を二人の恋愛の物語をして読むと、「いちばんかわいいひと」や「強くて光るもの」と互いに互いを表現しあう場面は二人の気持ちが通じ合う場面とも読める。物語を締めくくる「私たちは手をつないで、夜の空に吸い込まれそうに、その時間に溶け合っていた。」という一文は手をつなぐという行為で相手に触れ、一か月の間離れていた二人が同じ時を共有、あるいはひとつになったことを表現しているともとれるのである。

以上のように「友達」という言葉に収斂されない二人の親密な関係性を、恋愛で用いられる表現に着目しつつ読み解いていくと、「雪ウサギ」はプラトニックな同性愛の物語だととらえることが出来るテキストであるといえよう。

繰り返しになるが、異性愛の文脈を多く経験した読み手にとっては、物語に異性の二人

が配置されることがのちに恋愛につながる可能性を経験上知っている。異性愛中心主義の中では読み手が異性愛者であれ、同性者であれ、そのセクシュアリティを問わず経験的・体験的に異性愛の文脈を獲得しているからである。しかし、同性愛の文脈を経験したことがない、もしくは同性愛の文脈を持たない者は「雪ウサギ」の記述において恋愛の表現がなされていてもそこに配置されるのが同性二人である限り、二人の関係性は作中に出てくる「友達」という言葉に収斂されてしまうのである。

そこで、読みの一つとして本教材を「のっち」と「ベッカ」の二人の恋愛の物語として解釈する授業では、「読み手は文脈を持つ」ということを読み手である学習者が気づくことが授業の柱となるだろう。まずは異性愛の文脈を援用する形で同性愛の文脈に気づき、自らのもつ異性愛中心の文脈を相対化させる必要がある。具体的には学習者のもつ異性愛の文脈を、異性の二人の友人関係が恋愛に発展する物語を用いて相対化させ、読み手は文脈を持つのだということに気づかせるのである。次節では略案において授業展開を示す。

## 6. 学習指導案

国語科学習指導案（略案）

○対象 高校一年生

○単元名・教材名 小説「雪ウサギ」（谷村志穂）

○単元の目標

- ・小説の登場人物に関して、その思いや人物像を捉えさせる。（関心・意欲・態度）
- ・登場人物二人の思いや人物像を対比させて文章の中から捉えさせる。（読む）
- ・登場人物二人の関係性について記述に沿って捉えさせる。（読む）
- ・文章表現の中の言葉の意味と、その効果を理解させる。（知識・理解）

○評価規準

評価の観点	単元の目標	具体的な評価規準	評価方法
関心・意欲 ・態度	小説の登場人物に関して、その思いや人物像を捉えようとする。	「のっち」と「ベッカ」のそれぞれの思いや人物像を捉えようとしている。	行動の観察
読む能力	登場人物二人の思いや人物像を対比させて文章の中から捉えている。	「のっち」と「ベッカ」の二人の思いや人物像を会話などの叙述から対比させて捉えている。	記述の確認
知識・理解	文章表現の中の言葉の意味とその効果を理解している。	「のっち」と「ベッカ」の会話における言葉のニュアンスが二人の微妙な心のありようを表現していることを理解している。	記述の確認

単元目標や評価規準は三省堂の示す案例を参考に作った<sup>(12)</sup>。既存の読解指導の中で読み

の一つとして同性愛の読みを扱う授業であるため、元々の評価規準から大きな変更を必要としない。以下が指導計画である。

○指導計画（全5時間）

第一次 ・全文を通読し、語句の確認をする。

- ・登場人物について記述から整理して人物像を捉える。
- ・「ベッカ」と「のっち」の関係性について考える。

第二次 ・異性の友人関係について描かれた別の小説の一部分を読み、それと「雪ウサギ」に描かれる二人に関する記述や二人の関係性と比較して考える。

- ・「雪ウサギ」の二人の関係性について再考し、恋愛としての読み方をする際に手掛かりとなる資料からさまざまな解釈の可能性に気づく。

第三次 ・作品を朗読台本として書き換え、朗読する際に必要な指示、それのもととなる解釈や理由を本文の記述から説明する。

- ・出来上がった朗読台本を発表し合い、感想や意見を言い合う。

第一次では三省堂の示す指導案例、つまり友情や成長の物語として「雪ウサギ」の読解を行う。第二次前半で前節のテキスト分析が反映された同性愛としての読みの授業を展開することとなる。後半では他教科との連携も含めて知識・理解の授業を行う。第三次では学習のまとめとして、「雪ウサギ」の朗読台本を作らせる。展開は以下のとおりである。

○展開

時	学習活動、学習内容	指導上の留意点など
1	○全文を通読し、語句の確認をする。  ○「ベッカ」が転校したあとの「ベッカ」と「のっち」の二人の様子の違いを比べ、本文の記述をまとめる。	・「友情」「成長」として読解させる。  ・「のっち」の心情についてまとめさせる。 ※特にワークシートなどは必要ない。
2	○前時の復習として、のっちとベッカの関係性や人物像を振り返る。  ○最終場面での「かわいいもの」「強くて光るもの」「雪ウサギ」「星」などの対になっている表現を比べ、深める。	・前時でまとめた「のっち」の心情をもとに、「ベッカ」との関係性を整理させる。  ・対になっている表現をまとめ、「のっち」にとつての「ベッカ」、「ベッカ」にとつての「のっち」について考えさせる。
3	○自らの立場や読書経験等に基づいて読解にフィルターがかかる（文脈を持つ）ことに気づく。  ▽異性の友人同士から同性愛の恋愛につながる作品を読む。	※同性愛の作品は「雪ウサギ」と同様に二人の関係性が「友達」や「幼馴染」などのような言葉で表現されるが恋愛の物語として読めそうなものを用意する。作品は部分抜粋でも構わない。

	○再度「雪ウサギ」本文を「同性愛」の物語として読む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恋愛でよく用いられる表現を確認させる。</li> <li>・「友達」という関係を記述から読み直させる。</li> <li>・最終場面の表現について考えさせる。</li> </ul>
4	<p>○前時までの振り返り</p> <p>○同性愛当事者の声が反映された資料を用い同性愛やセクシュアル・マイノリティについて学ぶ。</p> <p>○読む人の経験や読書体験によって主となる読みが変わることを確認する。</p>	<p>※知識・理解の授業となる。他教科と連携を図っても構わない。なお、資料はドキュメンタリー映像などでも構わない。フィクションではなく現実世界の当事者の声であることが望ましい。</p> <p>・同性愛の物語の文脈をもつ人、「雪ウサギ」をはじめから同性愛の物語として読むことができる人も当然いることを確認させる。</p>
5	<p>○学習のまとめとして朗読台本を作成する。</p> <p>▽これまでの読解や本文の解釈を基に、「雪ウサギ」の本文に朗読の際の指示や留意点を書き込む。</p> <p>○周りと書き込んだ指示や留意点について交流し、作品の読みを深める。</p>	※教科書本文のコピーの周りに余白を多めにとったワークシートを用意する。

全5時間中、第1、2時間目を三省堂が示すように「友情」や「成長」の物語として読解させる。第3時間目で学習者のもつ異性愛の文脈を異性の友人が恋愛に発展する物語を用いて相対化させ、読み手は文脈を持つことに気づかせる。異性愛の作品は「雪ウサギ」と同様に二人の関係性が「友達」や「幼馴染」などのような言葉で表現されるが恋愛の物語として読めそうなものを用意する。条件を満たせば教科書教材、既習教材、独自教材でも構わない。作品は二人の関係性が「友達」や「幼馴染」などのような言葉で表現されており、なおかつ恋愛の物語として読めそうな部分のみの抜粋でも構わない。作品を読んで異性愛の物語と読めることを簡単に確認した後、「雪ウサギ」の本文を同性愛の物語として読解していく。

第4時間目では第3時間目の続きおよび振り返りとともに、フィクションとしての同性愛だけでなく現実の同性愛者の知識・理解の授業を行う。なお、可能であれば第4時間目は他教科との連携も考えられる。知識・理解を扱う第4時間目だけを他教科と連携することも、読解を行う第3時間目を他教科との連携の中に持ち込むことも可能である。他教科との連携の中では上記指導展開を柔軟に改変することが望ましいだろう。

授業の結びとなる第5時間目では、全時間の振り返りとして「雪ウサギ」の朗読台本を作成する。自らの読解や解釈をもとに朗読の指示を本文の書かれたワークシートに書き込み、できあがった朗読台本について周りの学習者と交流するといった流れとなっている。なぜ朗読台本を作るかという、第4時間目で授業が終わると授業展開が読解から知識・理解の活動で終わってしまうからだ。前述したように知識・理解の学習のまとめとして同性愛について学習者の感想を書かせるような活動は取り入れたくない。感想を書く活動ではない学習のまとめの活動を考えた結果、学習指導要領の言語活動例に着想を得て朗読台本を作ることに至った。書く活動ではあるが学習者の自身のセクシュアリティに関係なく、授業で得た知識を自身の読みに生かす形で再度読みが深まる活動になっている。

## おわりに

セクシュアル・マイノリティと国語の読む授業について論を進めてきた。国語の読むことの中でフィクションを用いることによって自身のセクシュアリティについて暴露されることなく、マジョリティ／マイノリティともに学んだことを読みに活かす形で授業を構想できたのではないだろうか。既存の授業の形を用いることで授業者の負担も少ない授業となっている。だが、授業展開を考えたもの実際に行う事が出来なかったため、今後の課題としたい。論の中でも取り上げたが、性教育の発展には揺り戻しが強い。また、諸外国に比べても日本の性教育の内容はずいぶん遅れていると言わざるを得ない。セクシュアル・ライツ（性の自己決定権）についてはマジョリティ／マイノリティ関係なく必要な知識である。今後の社会の動きを注視しつつ、誰のための教育なのかを念頭に入れて研究を進めていきたい。

## 注

- (1) 第154回国会 文部科学委員会 12第号 国会会議録検索システム  
URL <http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugin/154/0096/15405290096012a.html>  
2017/01/16閲覧。
- (2) バッシング現象について詳しくは『バックラッシュ！なぜジェンダーフリーは叩かれたのか？』（上野千鶴子・宮台真司・斉藤環・小谷真理ほか 双風舎2006年）や『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』（木村涼子編 白澤社2005年）などを参照されたい。
- (3) 文部科学省HP URL [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/1357468.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm)  
2016/05/17 閲覧
- (4) 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」には性同一性障害の児童生徒への学校における支援の事例も別紙に挙げられている。性同一性障害の児童生徒へのガイドラインを示すため学校現場での調査を基にした9つの項目（服装、髪型、更衣

- 室、トイレ、呼称の工夫、授業、水泳、運動部の活動、修学旅行等）とそれらへの学校現場における柔軟な対応の事例である。
- (5) 2016年3月18日付の毎日新聞にて「性的少数者や多様な家族については地理歴史や公民、家庭の3教科の教科書計31点に記述があり、うち家庭の4点がLGBTを取り上げた。」と報じられた。
- (6) 「クラスに必ず1人いる子のこと、知ってますか？～セクシュアル・マイノリティの子どもたちを傷つける教科書の訂正を求めます～」キャンペーンチーム集計による。  
URL <https://goo.gl/JkPIY6>
- (7) 電子政府の総合窓口e-Gov「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」に関する意見募集の結果について  
URL <http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=PCMMSTDETAIL&id=185000847&Mode=2>  
2016/12/30 閲覧
- (8) 「中学校における「性の多様性」理解のための授業づくり」渡辺大輔、楠裕子、田代美江子、良香織 教育実践総合センター紀要第10号 埼玉大学教育学部 2011年
- (9) 『高校生向け人権講座セクシュアルマイノリティ入門「もしも友達がLGBTだったら？」』セクシュアル・マイノリティサポート団体である新設Cチーム企画とQWRCが大阪府の高校有志の協力を得て2010年に作成したもの。DVDだけでなく生徒用のワークシートや授業進行例が書かれた教師用資料が付属。新設Cチーム企画では同様に小学生向けのDVDやLGBTサポートのための素材を多く制作・公開している。資料はすべて新設Cチーム企画HPでpdfにてダウンロードできる。  
URL <http://rupan4th.sugoihp.com/company.html#>
- (10) 「雪ウサギ」はもともと高校生向け通信学習講座である進研ゼミの高校一年生教材『高一チャレンジ』に1998年7月号から2001年11月号にかけて連載されていた高校生向けの読み物のひとつであり、その後連載された作品は加筆、編集を経て集英社より『ベリッシュオート』（谷村志穂 2003年）として短編集にまとめられた。短編集『ベリッシュオート』には恋愛、友情、家庭の問題や性といったテーマを高校生の中の日常の中に描き出した26篇の作品が収められている。『ベリッシュオート』内でセクシュアリティについての記述がみられるものは「スーは留学生」「ペンギン」の二つがある。
- (11) 三省堂HP新課程用国語教科書『明解国語総合』内容解説資料  
URL <http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/hKokugo/25TB/MeikaiKokugoSogo.html>  
2016/11/24DL
- (12) 三省堂HP評価規準例案資料  
URL <http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/hKokugo/25TB/MeikaiKokugoSogo.html>  
(本学大学院生)